

2025年度体験学習プログラム 参加学生レポート集

国内体験学習プログラム

福島を学ぶスタディツアー

「～福島の『今』を見て、現地で生きる人々の『言葉』から、
『自分』を見つめる～」

「私たちが知る理由」

内山 光惺(法学部 2 年次生)

今回の福島県での三泊四日のスタディツアーで、私が最も深く考えさせられたテーマがあります。それは、「被災者ではない私たちが、なぜ過去の悲劇をわざわざ知らなければならないのか」ということです。

その答えの大きなヒントは、初日に訪れた「うつくしまランチ」の掃部さんのお話の中にありました。掃部さんは「震災の事実を知り、伝承していく意義は、単なる防災・減災のためだけではなく、自分たちのような者が現地を訪れて書いた物や発表した物を見て、今の福島のあるさまを確認する人たちがいる。メディアはどうしてもそればかりを報道し続けることはできないから」と仰っていました。ボランティアという直接的な支援にまで至らなくとも、関心を持って知り、発信するという行動自体に、これほどまでの効果と意味があるとは思いませんでした。

三日目に訪れた「おれたちの伝承館」では、復興という言葉の裏側にある犠牲に直面しました。「牛に食べられた木の柱」の展示からは、人間が勝手に作り出したものから人間が勝手に逃げ出し、それでも動物たちはそこに残り残されて生きているという、身勝手さを強く突きつけられました。

同じく伝承館で伺った「透明化」という言葉も心に残っています。原発事故によって建物が取り壊された後に、新しい街並みが出来ていくことは人々が前を向いている良いことのように見えます。しかしそれは同時に、暗い過去の透明化でもあります。見た目が透明な水になっても、水そのものの中身が変わったわけではありません。汚い部分が見えないからといってその水を誤って飲んでしまえば、また必ず同じ過ちが起きます。それを防ぐためにも、ただ防災や減災という言葉で包み隠すのではなく、辛くても目を逸らさずに、真っ黒な当時の事実をなるべく濾過せずそのままの形で伝えていく必要があると感じました。

私たちが普段、何も罪悪感を覚えずに送っている普通で便利な生活は、決して当たり前にあるわけではなく、実は誰かの犠牲や畏怖の上に成り立っています。四日目にお会いした「大熊未来塾」代表の木村紀夫さんは、「風化させないというのは、被害者の気持ちを伝えていくこと。事実から教訓を繋げていくこと。これらをもって、それ以上の被害者ができる限り生まないこと」とおっしゃいました。原発の再稼働といった問題についても、過去の悲惨な事実を知らないまま便利だからと賛成するのと、事実から正面から目を向けた上で賛成するのでは、そこには埋めようのない大きな差があると感じました。



中間貯蔵施設で話を聴いているところ

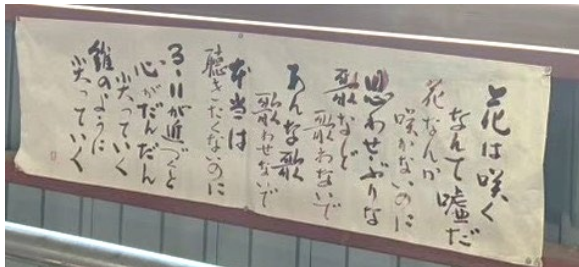
このツアーを終え、次に私たちが向き合うべき問題は「この事実をどう伝えていくか」です。全く関心のない人たちに、どうすれば少しでも関心を持ってもらえるか。過去の悲劇を知り、事実と教訓を繋ぐことで、未来の被害者を一人でも減らすこと。それこそが、被災者ではない私たちが過去を知り、伝え続けなければならない最大の理由なのだと確信しています。

私が福島スタディツアーに参加しようと思ったきっかけは、知らなかったからである。ニュースや新聞で福島のことについて見聞きしても、様々な問題や人々の思いを具体的に実感することができなかった。そこで、実際に経験を得たいと思い、福島へ向かった。

バスの窓から眺める浜通りの景色は静かで、「福島に来ている」という意識もあってかどこか特別な雰囲気漂っている気がした。ソーラーパネルが広がる平地を茫然と見つめながら、無に近いような感情の中で「ここに人が住んでいたのか」「ここが私の心でさだったら」など思いを巡らせた。

「コロナが始まった頃の排他的な雰囲気が、原発の頃と重なった」

「今は被害者だけど、放射能がある梨を作ったら加害者になると言われた」



おれたちの伝承館の展示されていた詩

現地の人言葉は、文字や動画で見るよりもずっと特別な力をもって私の心に訴えかけた。社会や人が未知の不安にさらされると、問題となる事実と被害者が結び付けられ、被害者をさらに孤立させてしまう構造が生まれやすい。それはあまりに短絡的で理不尽であり、憤りと疑問を覚える。このような状況下では、「被害者・加害者」「賛成・反対」という二極化した思想ではなく、いろいろな人の状況を考慮した立場でいることが、誰かにとっての味方になりうるのではないかと考えた。

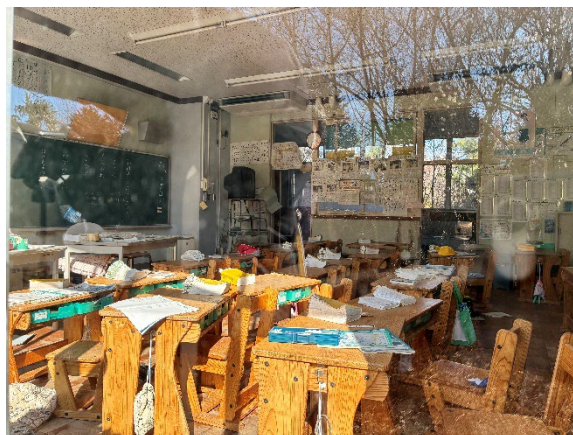
この四日間、さまざまな個別性に触れる中で、自分の中のふわふわしたものが徐々に重みを増していくような感覚があった。特に中間貯蔵施設を訪れた最終日は、震災と日常が隣り合わせにあることを強く感じた。光に照らされた教室の、付箋だらけの辞書や壁中に貼られた掲示物を目にした瞬間、子どもたちのにぎやかな日常が今ここにいる私たちと一体となってそこにあることを知った。自分が通っていた小学校の風景も重ね合わせながら、カメラを向けることにためらいを覚えながらも、「展示物」ではなく「日常」を写すような気持ちで記録に残した。震災によって止まったのは人工物だけという現実には、「生きること」と「贅沢」の境界について改めて考えさせられた。

今回のスタディツアーを通して、ポジティブな言葉や抽象的なものを表す単語の中に潜む、一種の暴力性を強く感じた。それは、問題となる対象からの逃避である。自分や他者の思い、「前向き」でない複雑な状況に対する責任放棄的な側面を持ちうる言葉は、一体誰に向けられた言葉なのだろう。私が小・中学生の頃に歌った「花は咲く」の意味とは、何だったのだろう。「復興」とは、「政府」とは、「国」とは。

残念ながら私は、このレポートを書くにあたって何からどのように言語化すればよいのか、どのように人に伝えればよいのかがわからない。それはきっと、人間が善悪や分類の判断をしたがる生き物だからだ。単純化した方が効率的で、不確実性への不安が減るから。今回出会った人の言葉、表情、そしてまちの様子は、ジャンル分けできるものでは決してなかった。福島のことを他人事ではないと感じたのは事実だ。だが、我々学生もまた学んだ気になっているだけ、あるいはその分野について少し知っただけの存在に過ぎない。私たちは日々、無意識の中である

対象から逃れ、責任を他人に転嫁・放棄しようとする。

人間が人間である限り、人間をやめることはできない。だからこそ、少なくとも私は、自分自身が納得できる人間でありたい。「知らない」を「わからない」に変えるところから、本当の意味で学びや成長が始まり、わからないことをわからないなりに考え続ける姿勢そのものが、人間としての価値になっていくと思う。このスタディツアーで出会った人、風景、空気、そして「モヤモヤ」を、いつまでも大切に生きていきたい。



熊町小学校の教室（窓の外より）

私は、南海トラフ巨大地震の発生と津波の大きな被害が想定されている地域で生まれ育った。幼少期から避難訓練や防災学習は日常の一部であり、避難所整備や耐震工事、市役所の移転といった行政の動きも身近に見てきた。そのため、大学に進学してからも、他地域出身の人と比べれば高い防災意識が備わっているという自負もあった。

しかし、その一方で「実際の震災や津波」に対して具体的なイメージを持っておらず、どこか自分事になりきれていないのではないかと感じていた。自分の目で、災害が起きるとどうなるのか見てみたいと考え、このスタディツアーへの参加を決めた。



大平山霊園からの景色

私がスタディツアーで最も心を動かされたのは、双葉町と浪江町の景色を見たとき、その現状を知ったときだった。「震災が起こるとはどういうことか」を自分の目で見たかったというのが今回のスタディツアーに参加した大きな理由だったが、それが2日目の双葉町への訪問で叶った。

私はこんなにも何も無い平地を見たことはなかった。いや、メディアなどを通じて何度も見たことがあったはずだった。しかし実際にその場に立ち、

目の当たりにすると迫力が違った。何もないのに圧倒され、圧迫感さえ感じた。言葉が出なかった。津波が来たらこうなるという事を実感させられ、大きな恐怖を感じた。

また、原子力発電や再生可能エネルギーについてのイメージも、スタディツアーの参加の前後で大きな変化があった。スタディツアーに参加を決めるまで、原子力発電については本当に無知で、再生可能エネルギーについても良いと言われている側面しか知らなかった。自分の中でそれらのイメージが様々な立場の現地の人の話を聞いたたび、コロコロと変わっていった。

これまでの人生、その方が楽だったのもあり、割り切って考えたり、自分はこうだと言い切ってしまうことの方が多かった。しかし、スタディツアーの中では自分がどう考えたらいいのか日に日に分からなくなり、そんな初めての感覚に混乱した。しかし、振り返りの時間で、他のメンバーも自分と同じようにモヤモヤを抱えていることを知り、簡単に結論が出せないことについてモヤモヤし続け考え続けてもいいのではないかと考えるようになった。

東日本大震災・原子力災害伝承館では、津波で被災したということが町として整備していくことへの障壁になっているという厳しい現実を知った。津波の被害を受けたという事が生活や町に与え続けている影響を知って、今までの自分には当たり前だった、津波が想定されている地元で暮らし続けていく事に対してどう考えればいいのか分からなくなった。うまく思いを言葉にすることができず、絶望に近い感情に陥っていた。

しかし、そんな思考停止状態の私を救ってくれたのは、現地で出会った方々の言葉だった。サポートセンターぴあの青田さんや、大熊未来塾の木村さんが語ってくれたのは、過去の悲劇だけでなく、「では、あなたはどうするか」という未来への問

いかけだった。その言葉に触れ、ふと地元の友人が語っていた「高台ではないから住めないのではなく、今の環境でどう生きていくか」という言葉を思い出した。今ある環境の中で、自分はどんな行動をとれるのか。そのために知ること、学ぶことの必要性を、ようやく自分自身の課題として捉え直すことができた。

ツアーを終えた今、新しく「伝えられなさ」という課題が生まれた。帰宅後、家族や友人に経験を共有しようとしたが、自分の言葉が相手の中の福島、東日本大震災のイメージになってしまうかもしれないという恐怖からうまく口を開くことができなかった。ツアーを通して自分の無知さについて思い知ったからこそ、自分が伝えられるほどの自信は持てなかった。

また、相手が防災に関心がない場合、どう話せば意識を変え、自分ごととして防災に取り組んでもらえるのかについても悩んだ。そこまで興味を持っていない人に防災の話をするのは中々骨の折れることだった。しかし、これまでの震災でもよく言われた「想定外」を減らしていくにはこうして地道に意識を変えていくしかないのではないかと思う。

そして報告会に向けて、スタディツアーに参加し、現地を体感した私たちとそうではない聴衆の間にある大きな温度差の中で、どう伝えていけばその温度差を少しでも埋めていけるのか。今はこの課題に向けて取り組むことが、福島で多くの貴重な体験をさせてもらった自分にできることだと思っている。

今回、福島スタディーツアーに参加し、多くのことを学び、考え自分を見つめるきっかけになった。私は今の福島を見て学んだことが多くある。それは大きく分けて2つある。

1つ目は、私たちの問題を他人事として捉えているということだ。私たちは同じ日本で起こっていることを知らないのではなく知ろうとしていないのだ。これは福島だけに限った話ではない。ただ、問題が日本の中のほんの一部に過ぎないから、都合の良いところだけしか見ないのだ。私たちは社会で何が起こっていて、何を抱えているのかについて知らなすぎている。そのため、私たちは社会について学ぶべきだと感じる。なぜ学び続けることが重要なのか。それは私たちがより生存し続けるためだ。実際に今回のツアーで話を聞き、原因を追求するのではなく、そこから何を学び、今後どう活かしていくのかについてフォーカスしていた。そのために私たちは当事者意識を持って考える必要がある。

2つ目は、便利と犠牲は紙一重ということだ。私たちの生活は都合の良いところばかりで、その便利な生活の裏にある犠牲に目を向けていない。福島の街を見たときに、街のいたる所が太陽光パネルで敷き詰められていた。また発電所なども多くあり、とても異様な光景だと感じた。だがこれが、私たちの便利な生活が生み出した結果なのだ。世



車窓から見た太陽光パネルが広がる風景

の中はすべて綺麗事だけではない。便利な背景には何があるのかを学ぶべきである。そして、綺麗事だけではなく都合の悪い部分も見続ける責任がみんなにもある。



窓から見た熊町小学校の教室

この2つを通して、今までにないような怒りを感じた。他責や自身の未熟さで、知らないことを正当化できないことだと感じた。ここからこのツアーを通して、少しでも自分ができることを考えた。それは3つある。

1つ目は防災だ。東日本大震災の経験や、福島で起こったことから私たちは何を学び、得たのか。私たちは過去の出来事として終わらせすぎているように感じる。そのために私達にできることは、ここで得た経験が無駄にしないことである。これから災害が起こったときに救えた命が少しでも多くなるよう行動していきたいと思う。

2つ目は正しい知識を身につけることだ。今回のツアーに参加して改めて、実際に現地に行き、触れてみないと正しい知識は得ることができないと感じた。現代社会では、今いる場所であらゆるところの情報を得ることが可能になった。そのためテレビやネットの情報が全てだと錯覚してしまうのだ。だが実際に現地に行き、様々な立場の人からの声を聞くことで真の生の情報を得ることができるのだ。

3つ目は言語化だ。様々な人からのお話や毎日

の振り返りの時間を通して、改めて自分の言葉で話すことの大切さに気づいた。現代社会は技術の進歩が進み、便利になった一方で、自分で考えることやそれを言葉に発する機会が減ったように思う。だが言葉で表すからこそ相手に響くものがあ

ると学んだ。

この福島スタディーツアーに参加して、福島のことだけではなく、これからの生き方を見つめ直すきっかけになるとは思わなかった。このような貴重なお話をこれからは活かしていきたいと思う。

「自分ごととして考える」

世戸 紳之典(政策学部 2年次生)

私は、この4日間を通して、原子力発電所があることによって多くの人の生活や人生に大きな影響をもたらしたということを感じました。それと同時に、私たちの生活についても一度考えなければいけないことであると実感しました。

福島第一原発の水素爆発によって原発の周辺では高い放射線濃度を記録するようになり、警戒区域が設定されるなど人々は不安に駆られ、住み慣れた街での生活が困難になった人もいました。いつも通りの生活の形から一転、身を守るための生活となり、思い通りの生活ができなかった場合も少なくはないと思います。

また、これが原因で人と人との間にも溝ができてしまったと言います。県外へ行っても福島から来たということを出しにくいという状況が続き、今でも福島県内では震災当時の話題を出しにくい雰囲気があるそうです。放射線による被害そのものによる身体的影響ではなく、対外的な影響が大きかったのだと思いました。

しかしながら、原子力発電所があったからこそ財源が安定し、設備の整った施設を使用することができたという自治体もあるそうです。大熊町はその一つで、「電源立地地域対策交付金」というものが支給されていたと言います。そのため児童館に床暖房が完備されているなど他の地域と比べて公共施設の設備が整っていたそうです。



「特別交付金によって設置された」という看板

また、東京電力によって福島で作られた電気は首都圏へ送られており、首都圏に住む人たちはその恩恵を受けています。そして、この作られた電気は福島県内で使われることはないそうです。

これらを踏まえて、私たちは原発という存在について一度考えなければならぬと思いました。原子力発電は温室効果ガスや発電コストが安定しているなどというメリットがあるそうです。その反面、チェルノブイリ原発や福島第一原発など、事故が起きてしまった際には人々の生活を変えてしまいます。そのリスクを考えた時に果たして原発があるべきなのでしょうか。今回お話を聞いた木村さんの言葉に、「生活が便利になっている影で誰かが犠牲になっている」というものがありました。現在事故の影響で警戒区域に指定されていて家に帰りたくても帰れない人がいます。その人たちが犠牲となっている状況があるなかで、私たちは平然と電気を使用して生活をしているという現実があります。

もちろんこの災害は色々な要因が重なって起きてしまったことであることやメリットデメリットあることなど一概に良い悪いについてはっきりさせることができるわけではありません。しかし、この4日間を通して一人ひとりが考えなければならぬ事柄であると学びました。それは福島に住む人たちだけではなく、福島で作られた電気を使っている人たちや同じ日本に住んでいる人々、一人ひとりもです。私はこのことについて、白黒はっきりさせることも大切だが、自分ごととして考えること自体が今後の教訓として必要なことであると感じ、たくさんの人に考えてもらうきっかけを作れたらいいなと思っています。

「モヤモヤから考える東日本大震災

— 福島スタディツアーを通して —

田方 稟乃(農学部 2年次生)

福島スタディツアーの最初に、引率者の竹田さんが「このスタディツアーはモヤモヤすることが多い」と話していた。私はその言葉を聞いたとき、その意味をよく理解することができなかった。しかしツアーを通して、その言葉の意味を実感した。バスの中やホテルの自室、そしてツアーが終わった後も、東日本大震災について考え続け、モヤモヤした感情を抱くようになった。このモヤモヤは、ツアーの中でさまざまな人の話を聞く中で何度も生まれた。うつくしまランチの掃部さんや渡部さんによる「復興」の話、南相馬市の福祉施設で勤務されていた青田さんによる「障がい者と震災」の話など、沢山の人の話が印象に残っている。その中でも特に考えさせられたのは、大熊未来塾の木村さんの「普通を疑う」という話である。

私たちの生活は文明の発展とともに便利になり、多くの恩恵を受けている。しかし、その便利さの裏で生じている犠牲について、私たちは普段あまり意識していない。もしその犠牲を知り、それが大きいと感じたなら、あえてその便利さを諦めるという選択もあるのではないかという話であった。この話を聞いたとき、私は自分の生活の中にある「普通」とは何なのかを考えさせられた。例えば食品業界では、品切れを防ぐために大量廃棄を前提とした仕組みが存在している。私たちはそれに疑問を持ちながらも、その恩恵を受けて生活しているのも事実である。また、私は大学で健康について学んでいるため、健康という視点からもこの普通について考えた。日本は医療体制が整っており、健康を享受しやすい社会である。しかし、その医療や薬は多くの研究や実験の積み重ねによって成り立っており、その過程では動物実験など多くの犠牲も存在している。さらに、昔は豆腐を買う際に自分の容器を持参していたが、現在は衛生管理や利便性のために使い捨て容器が一般的になって

いる。このように、便利さや安全の裏側には見えにくい犠牲が存在している。このように考えると、私たちが当たり前だと思っている「普通」の生活は、本当に普通と言えるのだろうかという疑問が生まれる。しかし、この問いには簡単な答えはない。だからこそ私は、「普通を疑う」という言葉に強いモヤモヤを感じたのだと思う。



木村さんに大熊町を案内していただいているところ

今回のスタディツアーでは主に被災者の方々の声を聞く機会が多かった。その中で、震災の問題は単純に善悪で判断できるものではないと感じ、強いモヤモヤを覚えた。しかし、このモヤモヤは私が体験したことがない東日本大震災を自分事として考えることが出来た証拠であるともいえる。私はアルバイトで肢体が不自由な人の訪問介護をしているため、「障がい者と震災」の話もヘルパーとしての視点から自分事として考えることができた。今回のスタディツアーを通して生まれたモヤモヤは、簡単に答えが出るものではない。しかし、このモヤモヤこそが震災について考え続けるきっかけになるのではないだろうか。モヤモヤしなければ、何も残らず忘れてしまうかもしれない。だからこそ、今回お話を聞かせていただいたことや現地で見たことを大切にしながら、これからも東日本大震災や福島の現状について考え続けていきたい。私の福島スタディツアーは、この先も続く。

福島スタディツアーを通して感じたのは、震災や原発事故は過去の出来事として終わったものではなく、現在も人々の生活の中に続いている出来事であるということである。現地を実際に訪れ、町の様子を見ながら話を聞くことで、ニュースや教科書だけでは分からなかった現実に触れることができた。

まず印象に残ったのは、地震と津波による被害の大きさである。請戸小学校跡では、震災当時の姿を残した建物を見ることができた。建物の周囲には桜の木や鳥の巣があり、同じ場所でも時間の経過とともに自然が変化している様子が見られた。周囲に整備された新しい街並みと、震災当時の姿を残した場所とが同時に存在していることで、震災の記憶が現在にもつながっていることを実感した。また、町には新しく整備された住宅や道路もあり、外から見ると復興が進んでいるようにも見える。しかし、うつくしまランチの掃部さんのお話の中で聞いた「昔には戻れない」という言葉から、建物が新しくなったとしても、震災前と同じ生活がそのまま戻るわけではないという現実があることを感じた。

次に、原発事故が自然や生活に与えた影響についても強く印象に残っている。阿部農園の一子さんのお話の中で、放射線対策として畑の表土を剥ぎ取り、山砂をかぶせる対応を取ったという説明もあり、自然環境が大きく変化する中で農家の方々が試行錯誤しながら生活を続けていることを知った。さらに、中間貯蔵施設周辺では放射線測定器を用いて実際に数値を測定する機会があり、放射線という目に見えない存在を数値として理解することの重要性を感じた。スクリーニング場で防護服を着用させていただいたのだが、その薄さや測定の結果から、防護服は気休めでしかないと思った。大熊町を出る際足裏の放射線濃度を測定されるのだが、私の数値が $130\mu\text{Sv}$ だったのに対し、

着用していない人の数値が $110\mu\text{Sv}$ だったからだ。あくまでも洋服に放射線を付着させすぎないことが目的の簡易防護服であったからこそかもしれないが、目に見えないからこそ測定を続け、状況を記録していくことが必要であると考えた。

今回のツアーを通して、地域のつながりの大切さについても考えさせられた。災害対応の説明の中で「自助・共助・公助」という考え方が紹介されていたが、国や県の制度だけでは対応しきれない場面もあるとお話いただき、自らが、普段から自分が地域のコミュニティに関わることが大切だと感じた。お話の中で伺った「人が歩くと人は助かる」という言葉から、地域の中で日頃から人が関わり合っていることが、災害時の助け合いにつながるのではないかと思った。

こうした学びから、自分自身の行動も少しずつ変えていきたいと考えるようになった。地域の力を高めるためには、まず、地域の活動に参加するようになった。また、私は人の役に立ちたいという考えがあり、震災時に役に立つ技術として高所作業などの資格取得にも挑戦しようと考えている。さらに、今回の訪問を通して、人は自然の中で生きており、自然は人間の事情に関係なく平等に過ぎていくものであるということも実感した。その中でどのように社会を支え合っていくのかを考えることが重要であると感じた。



車窓の風景

最後に、震災や原発事故は遠い場所の出来事ではなく、自分たちの社会の問題として考える必要があると感じた。災害について考える中で一つ、復興という言葉がテーマになってくると考えるが、復興とは何なのだろうか。私は、街を整備することだけではなく、そこに暮らす人々の生活やつながりをどのように支えていくかを考え続けること

なのではないかと思う。今回のスタディツアーを通して、このように今までぼんやりと抱いていた言葉について考えを深めるきっかけをたくさんいただいた。今後も答えのない問いに対して向き合っていていこうと心に刻んだスタディツアーだった。

私は震災当時3歳で東日本大震災の記憶はない。学校でも震災について深く学ぶ機会がなく、東北を訪れたこともなかったため、どこか他人事のように感じていた部分があったと思う。そのような中で、去年の夏に能登へのボランティアや岩手県を訪れた際、津波というものを身近に感じる経験があった。このような機会はなかなかないだろうと思い、今回のスタディツアーに参加した。福島では、さまざまな立場の方の話を聞き、今の福島の姿を目にした。津波や原発の問題だけでなく、エネルギーや多様性、地域のあり方についても考えさせられた。また、メディアでは伝わりきらない生の声を直接聞き、他人事にははいけないと感じた。

中でも、最終日に訪問した中間貯蔵施設でバスの中から見た景色が今も強く印象に残っている。住民の姿はないが、木々や鳥などの自然は静かにそこに生き続けていた。その一方で、人間が手を加えた建物や土地だけが取り残されたように感じられた。



バスを降りたときに通り過ぎて行ったトラック

バスを降りて熊町小学校へ向かう途中、フレコンバッグを積んだ大きなトラックが一台、目の前を通り過ぎていった。その光景は、どこか静かな雰囲気があり印象に残っている。「施設」という言葉から想像していた無機質な場所とは違い、そこにはまだ家や病院、小学校が残っているところもあれば、家の周りの柵だけが残っている場所もあっ

た。その風景から、確かにここに暮らしがあったのだと実感した。

中間貯蔵施設を案内して下さった木村さんからのお話の中で、特に印象に残っている問いかけがある。それは、2045年までに除染土の最終処分を行わなければならないという話の中で出てき

た。以前、木村さんが小学生にこの話をしたところ、一人の小学生が「全国の自治体で分け合えばよいのではないか」と言ったそう。その話をした後、私たちにに対して、「あなた達の地域を最終処分場にしていけるか」と問いかけられた。私は何も答えられなかった。すぐに答えを出せなかったのは、その決断の責任の重さを感じたからだと思う。今回のスタディツアーで福島の皆さんの苦悩や、ふるさとの景色が変わってしまった現実を目の当たりにして、福島だけに負担を押し付け続ける現状には強い違和感を覚えた。日々電気を享受してきた者として、この電気がどんどころから来ているのかを知るとみて見ぬふりをしてはいけない問題だと感じる。

スタディツアー後に訪れた会津若松の飲食店では、住民への説明なしに進められる風車建設に反対する内容のポスターを見かけた。南相馬でもたくさんの巨大な風車や山を埋め尽くす太陽光パネルを目にした。調べてみると、再生可能エネルギーをめぐって同様の問題が全国各地で起きていることが分かった。答えや結論を急ぐあまり、反対する意見が十分に汲み取られないまま進められていくことに、疑問を持った。復興やエネルギー開発といった発展は、いったい誰のために行われているのだろうか。

今回のスタディツアーを通して、何も知らないまま答えを出すのではなく、まずは知ることが大切だと改めて感じた。だから、これからも様々な立場の人の考えに触れ、知識を得た上で、自分なりに考え続ける姿勢を持っていきたい。

4日間の福島スタディツアーを通じて、2011年に発生した東日本大震災の伝承のため努力を続けている多くの人々に出会いました。私が今回の福島スタディツアーに参加したきっかけの一つは、人の喪失体験におけるグリーフケアについての研究を行うにあたり、震災現場で喪失体験をした木村紀夫さんの話を聞く機会があるということでした。

木村さんにお会いするまでの3日間では、請戸小学校や福島原子力発電所事故を学ぶ伝承館を訪問したことで、発生から15年経過した東日本大震災をやっと自分事として捉えることができました。2011年3月11日の震災発生により、学び舎から震災遺構へ変化した請戸小学校では卒業を控え、未来へ高揚する気持ちや別れの寂しさを抱き、卒業式を心待ちにしていた当時の生徒や教員の姿が目には浮かび、胸が締め付けられました。さらに伝承館では救助活動が不可能となる事態を招いた原子力発電所事故を「人災」と表現していることが非常に印象的でした。震災は人や住まいだけではなく、日本の農作物の生産を支える東北地方の風評被害によって、日常の生活などの当たり前だと信じられてきたものまで奪っていったことを実感しました。

梨農園を営む阿部さん、障がい者・地域への支援活動に尽力されている青田さんと佐藤さんの話や、アート作品で伝える俺たちの伝承館を訪れて、それぞれに生きがいがあり、福島でなければならぬ強い意志を感じました。福島の梨を育てたい、家族のいる故郷を守り、残したいという思いで活動されていることは震災を伝えることであり、福島を生かすことにつながっていると思います。今回のツアーの中で「復興」という言葉の意味についてさまざまな意見が出されました。私は、福島県は日本を構成する重要な1つであり、どのような形であっても福島という場所が誰かにとっ

での生きがいでありつづけることが復興なのではないかと考えました。



おれたちの伝承館・屋外展示作品

ツアーの中で最も印象に残っていることは、最終日の中間貯蔵施設への訪問と木村紀夫さんの話です。木村さんの娘である汐凧さんが通った小学校や児童館、家族が暮らした家屋や町民が集まった小さな公民館は2011年3月11日のまま残されており、まさに時間が止まっているという状態に驚きました。小学校の教室は当たり前の3月14日を迎えようとしており、今にも生徒らが集まる様子が想像できるのにも関わらず、人が手を加えていない荒れた校庭の植物や、更新されない学校通信、止まったままの時計を目の当たりにして、自然の強さと人間の儚さを同時に突き付けられたようでした。さらに、汐凧さんの遺骨の一部を発見した時の木村さん自身の気持ちと、見つけられた汐凧さんの気持ちをどう捉えているのかについて質問させていただきました。実感がすぐには湧かない中で、「私はここにいるからね。」というメッセージを感じたそうです。大熊町は震災と原発の影響で数年間は汐凧さん1人だった期間がありましたが、体のすべてが見つからないことには汐凧さんが大熊町に残り続けてくれているという意味と、これ

からも1人のために多くの人を訪れる場所であってほしいという意味があるという回答をしていただきました。この木村さんと汐凧さんからのメッセージから、残された人間には人の死を教訓とするのではなく、生の証を残して未来を構築する使命があるように思いました。

今回のツアーに参加したことで将来の医療ソーシャルワーカーという職業の目標に加え、災害における支援にも尽力できる人材になりたいと感じました。さらにグリーフケアを研究するにあたり、福島で実感した、残された人の背景には残した人がいる、ということを忘れずに学び続けていきます。



木村さんの自宅近くの本だけ生き残った松の木

私が福島スタディツアーの4日間を通して感じたことは、原発問題について「賛成」か「反対」かを簡単に断言することはできないということだ。今までの私はテレビやインターネットの議論において「賛成側」と「反対側」という2つのグループをよく目にしていた。しかし、今回のツアーで出会った人々はその狭間に位置し、私自身原発に対して今までにない角度から考えることができた。

その中でも特に印象的だったのが、中間貯蔵施設での木村さんのお話だ。当時のままの教室を前に、亡くなった娘さんの話をされる姿は、悲しみと同時に力強さを感じた。「原発事故がなかったら助かっていたかも知れない」原子力発電に対しての抵抗感が強くなるのは当然だと思った。しかし、お話を重ねる上でその“葛藤”についても私たちに伝えてくれた。「原発の誕生により、街に雇用が生まれたこと。また、立派な児童館は原発のおかげで建てられたもの。贅沢をしていたからバチが当たった。」これは原発から今まで恩恵を受けていた自分たちを認めることによる発言だと思う。その上で本当に電気は人を豊かにするのか、生きていくために必要なのか。それらを私たちに考えを押し通すのではなく、「皆さんはどう思いますか？」聞いてくれたことに感謝したい。



児童館

私は大阪の都市部に生まれ、今も住んでいる。身の回りで原発に対して常日頃から恐怖心を抱いている人はほとんどいない。むしろ肯定的な感覚を持っている人がほとんどだ。しかし、私たちは一方的に恩恵を受けている側であるという自覚を持つ必要があると痛感した。スイッチひとつで部屋は明るくなり、どこでも充電ができ、夜でも街灯のお陰で安心して歩くことができる。そんな当たり前のような便利さの背景には原発があり、福島の人々の生活や感情が存在するという事実がある。ツアー参加前も分かっていたつもりだが、所詮“つもり”であった自分がとても恥ずかしくなったと同時に、この経験が自分の視点を大きく変えてくれたことに感謝したい。

今回の福島スタディツアーで得た学びを知識として終わらせてはならないと思う。原発問題には明確で一つの正解があるわけではなく、人々の生活、記憶、感情、歴史が重なり合って成り立っている。その複雑さに触れた今だからこそ、自分の立場や日常を問い直し、これからどのように生きるのかを考え続ける責任があると感じた。

そして、私達の便利な暮らしの裏側には、見えない誰かの選択や痛みが存在する。そのことを知った以上、私はこれからも一つ一つの行動や選択の背景に想いを馳せ、より丁寧に生きていきたい。ツアーで出会った方々が示してくださった問いかけや姿勢は、私の価値観や視野を確かに問い直してくれた。この経験を活かして自分自身の生き方や将来に活かし、原発をめぐる議論を“自分ごと”として考える姿勢を持ち続けたいと思う。また、それを自分だけで留めるのではなく、発信することでこの経験を広めていきたい。

私は4日間のスタディーツアーを通して、現地に
行くことでしか味わえない気持ちを知ることが
できた。東日本大震災発生から15年が経つ。死者 1
19,775人を出し、行方不明者は2,550人もい
る。福島原発は15年たった今でも廃炉処理が行
われ、2051年終了を予定している。放射能が消
えるのは気が遠くなるような年数が必要である。
帰宅困難区域の指定は解除になったが、特定帰還
居住区は指定されている。そして津波で失われた
町を元に戻し、生活を成り立たせなくてはならな
い。

福島スタディーツアーでは、NPO や農家、福祉
関係者からお話を聴くことや震災遺構を見学する
こと、中間貯蔵施設のフィールドワークをすること
ができた。私が見聞きしたことは福島が受けた震
災の状況の一部であると思う。しかしその中で特
に考えさせられたことは、「復興とは何か」、「災害
のマニュアル化」の2つである。

「復興」という言葉は、NPOの方からのお話でも、
伝承館でもいろんな場所で聞く言葉だった。「復興」
を辞書で調べると、「一度衰えたものが再び盛んな
状態に戻る」と書かれていた。震災から15年が経
って、ニュースや新聞では福島の帰宅困難区域が
徐々に解除され、新しい建物も建てられて、元通
りになっていると思っていた。しかし、うつくしま
ランチの方に、「復興」とは何かと質問したところ、
「もう元には戻らない」「もっと良くなる状況が
復興である」と話していた。

現在の福島は確かに生活基盤が整備されてきて
はいるが、多くのソーラーパネルが設置されて
いる風景や、「福島に来て、食べて、飲んで」のよ
うなポスターがある風景となっている。観光が「
復興」なのか、復興のためにソーラーパネルを設
置するのは本当の「復興」なのかをとても考え
させられた。被災された方にとって、故郷は災害
前の姿に二度と戻ることはできないのである。

また津波の被害にあった請戸小学校の看板に
書かれていた言葉は、「復興とは、復興のことを考
えなくなる」と書かれていた。現在、災害遺構
を残すかどうか議論がされているが、私は災害
遺構を残すという事は必要であると考ええる。災
害遺構は震災のつらい気持ちをかき立てる場所
ではあるが、そこで生活していたという証であり、
人々の帰る場所なのである。それを消してしまう
と故郷の風景がなくなるのである。そのため、こ
れからも災害遺構を残し続けて、後世に災害の
恐ろしさを伝えながらも当時の人々の帰る場所
にもなってほしいと考える。町を復興させるた
めに新たに整備・建設され、多少姿形が変わる
のは仕方が無いことではあるが、出来れば本
来の姿に近づけて戻せたらいいと思う。



震災遺構請戸小学校の体育館

そして原発事故が発生し、帰宅困難地域とな
った市町村での復興はとても厳しい。まず放射線
は目に見えない。しかし放射線は人体に害をもた
らすものである。政府発表の放射線物質の数値に
よって、行動が制限される。特に農産物を作る農
家では、放射線を農地全体が浴びているので、よ
り深刻な状況である。



中間貯蔵施設内

まず放射線量が高い地域は、4年間自分の家から避難し、県外で生活をした。家族が別々で暮らし、仕事を失う。そしてさらに7年の間除染が行われ、避難区域の解除や見直しが行われたのである。その間に農業など前の職業を諦める人も出ている。また放射線不安や生活基盤を無くしたことにより、避難した人の帰還率は低い。土の除染も土地を5

cmほど削ってフレコンバックに入れる。2023年には原発廃炉のために発生した汚染水を処理して海に放流している。農業を営む人は、政府の指針通りに農業を続けているが、これでいいのかと思っている人もいたようだ。

このように、東日本大震災は多くの人を悲しみのどん底に落とし、生活を奪うこととなった。災害はいつ起きるか分からないからこそ、起きたときにどう対処すべきかの「災害マニュアル」「非常時の子どもの引き渡しマニュアル」が必要である。津波で次女を亡くされた木村さんは、「自分の経験を役立てて欲しい。そうでないと私の経験の意味がなくなってしまう」と語ってくださった。またお話をいただいた人全員は、「自分が被災しても前を向いていて、自分の経験を次につなげてほしい、役立ててほしい」と語ってくださった。私たちは語り部の話をよく聞き、今後二度とこのようなことが起きないように、綿密なマニュアルを作るべきである。そして将来を見据え、エネルギー問題についてもどうすべきかを考える必要がある。

私が今回の福島スタディツアーに参加した目的は、生の声を聴くためである。福島復興や原発の再稼働、エネルギー政策についての率直な意見が知りたくて参加した。テレビやインターネット、本でも知ることはできる。しかし、そこからは綺麗な文章にするまでにそぎ落とされた感情や、賛成/反対の二元論に落とし込まれた意見は汲み取ることが難しい。だからこそ現地に足を運び、実際にそこで生活する人々の声を直接聴きたいと考えた。

今回のツアーでは、南相馬市や浪江町を訪れ、中間貯蔵施設の周辺を見学する機会を得た。震災から15年が経過していることもあり、私はある程度復興が進んでいるのではないかというイメージを持っていた。しかし実際に現地を訪れると、そのイメージと現実の間には大きな乖離があることに気づかされた。道路は整備されている場所も多いが、避難した人々が福島に戻ってきていないという現実があった。

私は21年間関西からほとんど出たことがない。そのため、福島復興=インフラの回復、不便さがなくなることだと思い込んでいた。しかし、そうではないのである。復興とは「ふたたび盛んになること」を指す。私が考えていたことは「もと通りになること」を指す復旧であった。

その違いを強く実感したのが、中間貯蔵施設内にある熊町小学校である。校舎には震災当時の子どもたちの靴や教科書がそのまま残されていた。子どもたちが日常を過ごしていたはずの場所が突然失われたという事実を前にすると、震災や原発事故がもたらした影響の大きさを改めて感じざるを得なかった。そこに通うはずだった子どもたちや地域の人々が戻らなければ、そこにあった日常は取り戻せない。インフラの整備だけでは地域は盛んにはならないのだと実感した。

また、社会福祉協議会の方のお話で印象に残っ

たことがある。「想定外という言葉は責任逃れに使われる」という指摘である。災害や事故の際に想定外という言葉が用いられることは多いが、日本に住んでいれば災害はいずれ起こる可能性があることは誰もが理解している。また、災害や事故には常に人命が関わる。だからこそ、本来はどこまで想定し、どのように備えるべきだったのかという議論が必要である。しかし「想定外」という言葉が用いられることで、その議論が十分に行われないうまま責任の所在が曖昧になってしまうのではないかと感じた。現地で生活してきた人の言葉としてこの指摘を聞いたとき、これまで何気なく聞いていた想定外という言葉の重さを改めて考えさせられた。



震災当時のままの大熊小学校

さらに、震災で娘を亡くされた木村さんのお話も強く印象に残っている。木村さんは、東京電力の社長が「電気を作ることは命を守ることだ」と発言したことに対して怒りを覚えたと言っていた。電気が現代社会にとって不可欠なものであり、人々の生活や安全を支えていることは確かである。しかし、原発事故によって実際に命や生活を失った人がいるという現実を前にすると、その言葉が当事者にどのように受け取られるのかを想像することの重要性を感じた。我々は常に電気を使用する側で、守られている側だが、その背景には何があ

るのか知る必要があると感じた。



今回のスタディツアーを通して、原子力発電をめぐる問題の複雑さを改めて実感した。現地で話を聞くと、原発に対する立場は人によって大きく異なっていた。事故による被害や怒りを語る人もいれば、地域の現実やエネルギー問題を踏まえて複雑な思いを抱えている人もいた。こうした多様な声を直接聞くことで、原発の問題を単純な賛成／反対の二元論で捉えることはできないのだと感じた。

また今回の経験は、電気を「使う側」にいる自分自身の立場についても考えさせるものであった。

私たちは普段、電気があることを当然のものとして生活している。しかし、その電力の背景には発電所があり、地域があり、そして事故が起きたときには取り返しのつかない被害を受ける人々がいる。電気を消費する社会の一員として、その現実から目を背けずに考え続ける必要がある。電力は社会を支える基盤であり、経済活動や医療や生活を守る側面を持つ一方で、その供給の過程では大きなリスクが伴う。だからこそ、特定の発電方法を無条件に排除するのではなく、それぞれの利点とリスクを冷静に見つめながら、社会全体で責任を引き受けていく必要があるのではないかと感じた。

福島で見聞きした出来事や人々の言葉は、私がこれまで持っていたイメージを大きく揺さぶるものであった。今回のスタディツアーで得た学びを一時的な経験として終わらせるのではなく、災害やエネルギー、そして私たちの生活のあり方について考え、また、電力や技術の恩恵を受ける社会の一員として、その利便性だけでなく、そこに伴う責任についても考え続けていく必要があると感じた。

今回のスタディツアーでは、様々な方からお話を聞き、それぞれの立場の人々が持つ考えやアート、展示に触れ、「これからどのように生きていくか」「復興とは何なのだろうか」ということについて深く考えることができたと感じています。

この4日間のスタディツアーを通して、防災への意識が向上しました。今までは隣の部屋に住む人の名前も顔も知らず、災害時の避難場所も知らず、災害時に家族がどのように行動するかも話し合ったことがありませんでした。日本は地震が多い国だと理解していながらも、心のどこかで「自分は大丈夫」と過信していたのだと思います。スタディツアーを終えて帰宅した後、家族と一緒に避難場所を確認し、災害時の家族それぞれの動きについて話し合いました。そして、自分の住む大津市に起きた地震の記録を調べてみました。

1946年以降約80年は大きな被害をもたらす地震は起きていないようでしたが、1946年以前は100年間で2~4回ほどのペースで大きな地震が起きていることが分かりました。自分が考えていたよりもはるかに多い地震の量に驚くとともに、滋賀県の防災意識の低さを改めて実感しました。中学校や高校でも避難訓練は行われていましたが、訓練で想定されていた災害の多くは火災であり、地震の避難訓練は中学校、高校と6年間学校に通っている中で1回ほどでした。海に面しておらず、津波の危険性が極めて低いことや、80年近く地震が起こっていないことが、県民の危機意識を低下させているのではないかと考えます。

今回のスタディツアーでは、中間貯蔵施設の見学が印象に残っています。立ち入り禁止エリアに入ることができたことはとても貴重な体験であったと感じています。防護服を着るかどうかわざりましたが、大熊町の空気をしっかりと肌で感じたいと考え、着用しないことを選びました。見学をする中で、首から下げた測定器の数字が少しずつ上昇

していくのを見て怖くなりました。アスファルトや金属、植物など、物体によって数値の上がり方が違うことを知りました。少し場所が異なるだけで大きく数値が異なることがあると聞き、当時の被災した人々が、不安な気持ちから手当たり次第に数値を測る気持ちを理解することができました。数値を知らない方がいいという人もいますが、私だったら自分が行くところ、食べるもの、触れるものなどあらゆるものを測ってしまうだろうと思いました。



空き家の前にバリケードが設置されている

見学した大熊小学校では、黒板に書かれた3月14日の文字が印象的でした。震災によって当たり前が当たり前でなくなる瞬間を強く感じ、胸が痛かったです。見ていた教室は自分とほとんど同じ年齢の子どもたちの教室だったので、懐かしく感じる部分も多く、より強く自分事として捉えられたと感じています。話を聞くだけではなく、震災の悲惨さを実感することができました。この場所を訪れることができ本当に良かったと感じています。

この4日間で様々なことを感じ、考えることができました。今回のツアーに関わってくださった方々からのメッセージを受け取り、考え、これからの生活につなげていきたいです。

「復興」とは何かを問い続ける

— 福島スタディーツアーを通じた学び —

牧村 恵里(社会学部 3年次生)

私はこれまで、能登半島の災害ボランティアプログラムに参加し、インフラ復旧の現場や地域の「復興」を目指す取り組みに関わる機会を得てきた。また、能登半島地震の支援活動に参加した際、同じ被災者であっても「復興」の受け止め方や必要とする支援が一人ひとり異なることを実感した。災害の種類や規模、地域性によって状況は大きく異なるが、震災から15年の年月が経った福島の現在はどうのような姿なのか、また震災と原発事故という大きな困難の中で地域がどのように歩んできたのか、を自分の目で確かめたいと考え、本スタディーツアーに参加した。実際に現地を訪れ、語り部の方々の言葉に直接触れることで、これまでニュースや資料を通して知っていた福島とは異なる、地域の「今」の姿を感じることができた。



広大な広さでソーラーパネル

今回のスタディーツアーを通して特に考えさせられたのは、「復興」という言葉の意味である。一般に「復興」という言葉からは、震災前の状態に戻ることがイメージしがちである。しかし、語り部の方々に「復興とは何か」と伺った際、多くの方が「元には戻らないものだ」と語っておられたことが

印象に残っている。災害によって生活環境や地域の姿、人々の立場や思いは大きく変化する。そのすべてを元の状態に戻すことは容易ではない。一方で、地域のお祭りや人と人とのつながりなど、形を変えながらも受け継がれているものがあることについてもお話を伺った。こうした語りを通して、復興とは単に「元に戻る」とではなく、困難を経験した地域が新たな形で未来を築いていく過程なのではないかと感じるようになった。また、地域はこれまでも地震などの災害を経験しながら形づくられてきたというお話もあり、現在の地域の姿もまた、長い時間の中で積み重ねられてきた歩みの一部であることを学んだ。

もう一つ強く感じたのは、「話すこと」の大切さである。うつくしまランチの方々には、震災について語ることの難しさについても率直に話して下さった。被災者同士であっても相手がどのような経験をしてきたのか分からず、言葉を選ばなければならないことがある。また、被災していない人との間には関心の差が生まれ、そのギャップに戸惑うこともあるという。今回のスタディーツアーでは、語り部の方々のお話を聴くだけでなく、参加した学生同士で感じたことを語り合う機会も多くあった。語り合う中で、自分では気づかなかった視点に出会い、自分の考えを深めることができたと感じている。出来事を風化させないためには、経験を語り継ぐことだけでなく、互いの考えを受け止めながら対話を続けていくことが重要なのではないかと感じた。

また、「あなたにとって復興とは何か」「この状況であればあなたはどうか行動するか」といった問いを投げかけていただいた。そこには唯一の正解があるわけではなく、人の数だけ異なる考えや思いが存在する。原子力発電の問題をはじめ、社会の課題は白か黒かの二面だけで語ることもできるも

のではない。だからこそ、異なる立場や経験を尊重しながら対話を重ねていく姿勢が求められているのだと感じた。

さらに今回の学びは、社会福祉の視点からも重要な示唆を含んでいると感じた。災害後の地域では、生活環境の変化やコミュニティの分断などによって、人々が抱える課題が多様化しやすい。そのような状況においては、制度的な支援だけでなく、人々が経験や思いを語り合える場の存在が重要になると考えられる。語り部の方々の活動や地域での対話の場は、震災の記憶を伝えるだけでな

く、人々が自らの経験を意味づけ、地域のつながりを再び築いていく営みでもあるのではないかと感じた。

今回のスタディーツアーは、福島の実状について学ばせていただくと同時に、「復興とは何か」という問いを自分自身に投げかけ続ける契機となった。語り部の方々が伝えてくださった経験や思いに敬意を払いながら、災害や地域の課題を一面的に捉えるのではなく、多様な視点から考え続けていく姿勢を今後も大切にしていきたい。

福島での4日間。私にとって、単に震災の歴史を学ぶ時間ではなく、自分自身の「生き方」そのものを考えさせられる時間となった。滋賀という海のない場所で暮らす私にとって、遠く離れた東北で起きた津波と原発の災害は、これまでどこか他人ごとの、一つの出来事としかとらえられていなかった。報道や画像を通して知ったつもりになっていた福島という場所には、勝手に「かわいそうな被災地」とラベルを貼り、関係のない、遠い世界だと思っていた。自分は何も知らない、現地で何を感じるのか。戸惑いを持ったまま現地に赴いた。

現地を歩き始めるとそこには報道や画像では決して感じられない現実があった。被災した方々からのお話。震災遺構として残された建物や多くの展示、目に入る景色。何をとっても今まで感じたことのない、話せない、整理できない感情に包まれた。

中間貯蔵地区で見た景色と家族を失った現実のお話。積み上げられるフレコンバック、いまだ解体されていない建物が残り、誰も住んでいないこの土地で多くの人の当たり前だと思っていた暮らしやものがあつた場所が、今は管理される場所となってしまった。当時から形が変わっていない熊町小学校を見た時、私は受け止めきれないほどの感情に襲われた。そこに子どもたちがいて、騒いでいてもおかしくないような景色が元に戻ることはない。探し続ける人、語ってくれる人がいて、足を踏みいれられている貴重さを知らなければいけないと強く感じた瞬間だった。

一番衝撃を受けたのは請戸小学校だった。足を踏み入れた時、感情も魂も持っていかれそうだった。ぼろぼろの教室や体育館、止まった時計も何もかもに圧倒され、何の言葉も発せられなかった。一人でそのままの姿の教室の前に立ち止まると目の前に広がる景色の残酷さに何を思えばいいのかわからなかった。今もなおあの場に立った時の

感情を言い表すことが、私は出来ない。

当時小学生で被災して、10年後の思いを綴った言葉があった。「自分の人生好きなことをやりたいように生きる。それが誰かのためになるのでいいと思う。結局ものは言いよう考えよう。」請戸小学校の校舎とその言葉を見た時、被災から10年という月日で元の生活を手に入れられた人なんてきつとなくて、つらい思いをしてきた中で前を向こうとしている人がいることにはっと気づいた。悲惨な経験をしたからこそ、誰のためでもなく、自分の人生を自分で定義されたその言葉が、私に深く響いた。これまでの私は周りを気にして、他のこ



震災遺構 請戸小学校の教室

とを気にして自分の本音に蓋をせばかりだった。同じ物事でも見方を変えればきっと自分の為になる部分があるはずなのに、そこに目を向けない私自身が嫌だからこそ、自分の人生は自分でつかまなければいけないと学ばされた。

福島で過ごした4日間は私に「生きる強さ」を教えてくれた。請戸小学校で出会ったこの言葉は、きっと忘れることはないし、ずっとその方が経験し、書き残してくれたことが私の背中を押してくれる。「ものは言いよう考えよう」という前向きな強さを胸に堂々と私の人生を歩んでいきたい。私にとって人生と向き合う4日間だった。

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<https://www.ryukoku.ac.jp/npo/>
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261